

谷口真子氏博士（文学）学位請求論文  
『実力行使からみた近世社会と法規範』  
審査報告要旨

2005 年 1 月 25 日

本論文は、国家と社会の相互作用によって形成される規範の把握が必要であるという課題意識に立ち、社会諸階層の日常生活における「実力行使」を切り口とし、近世日本において形成される法規範を解明しようとしたものである。論者は研究史の検討として、先ず中世ヨーロッパの慣習的な「実力行使」を表す「フェーデ」と、それを国家が規制する「ラント平和令」の関係を概観し、次に日本中世の自力救済、近世権力による規制についての先行研究を取り上げる。そして近世国家によって自力救済が抑圧され自律性も恣意的な裁判権の枠内に包摂されたとみる先行研究が、「ヨーロッパ近代」の過度の理想視と一体であることを指摘して、国家の成文法と社会の「生ける法」の双方に目を配り、「実力行使」の実態を通して現れる法規範をとらえる。この観点から、論者は、村社会の鉄火裁判、庶民・武士・軍隊における喧嘩の禁止と成敗・「正当防衛」、忠孝道德と寛刑厳刑の関係、密通仕置と武士・百姓・町人の女敵討・敵討、武士のみに認められる無礼討、無礼の觀念と変容など、数多くの実例を分析している。

本論文の学問的寄与の最も大きな点は、「実力行使」概念を用いることで史実を豊富に取り出し、近世社会の歴史的位相を照らし出したことである。論者は、一見異質な訴訟や道德の領域にも踏み込み、法規範の構造と変化を全時期にわたって考察する。この手法によって、「実力行使」の種類、身分・男女による共通点と相違点、変化の方向を、研究史をはるかに凌駕して明示し、近世社会の全体像の再構成への可能性を示した。鉄火裁判、喧嘩両成敗、敵討、無礼討などの個々についてはこれまでに研究も概括もあるが、論者は、「実力行使」という上位の概念を用いることによってそれらを総体として取り上げ、相互の位置関係と変化の方向を取り出した。また従来、喧嘩両成敗や無礼討などは法制史研究者が法制史料の文言からのみ立論するのが普通であったが、論者は、幕府諸藩の法令だけでなく、実際の関連事件の裁判記録、武士・百姓・町人社会の紛争と復讐・解決に関する一次史料、識者の身分論・社会論に関して系統的な史料調査・収集を行い、詳細な検討を加えた。これによって社会の「生ける法」と国家の法との相互作用が明らかになった。

本論文は、近世日本を考察したものであるが、その前提として中世後期の室町幕府法・戦国分国法と社会の「生ける法」の相互関係を考察している。故戦防戦、喧嘩停止、下手人制、質取、中分・折半、大名裁判権、敵討などを検討し、戦国社会にすでに「正当防衛」と「暴力」の区別が現れることを析出し、これらの前史を踏まえて近世の研究に向かう。

論者は近世では、制限されつつもある種の「実力行使」に「正当性」が認められていたとするが、認められたか否かにとどまらず、複数の解決法があって「実力行使」はその一つの選択肢として認められたとする。村社会の鉄火裁判も、鉄火取りをカードにした駆引きが多様に行われ、領主への提訴と裁定を優先させたとするなど、紛争解決に「実力行使」が絶対的ではなかったことを明らかにした。通念化している喧嘩両成敗についても、庶民・軍隊・大名の社会集団や身分によって違い、当座の喧嘩か一方的攻撃か、殺害か傷害か、故意か過失か、加害者に責任能力があるかによっても違うなど、高度な法概念が駆使されて両成敗になったり「正当防衛」が認められたりしたことを本論文は解明した。

これらの検討を通じて、近世の権力が、理非を考えずに親類縁者・傍輩知音が頼み頼まれる関係意識で加担する心性を変えようとしたことや、支配権力に「家」が組みこまれている武士（家臣）には、「ノブレスオブリジュ」が求められ、腰抜け・臆病呼ばわりや無礼に対して身分の名誉を守るために、「強制された正当防衛」の行為で対しなければならなかったことなど、権力や身分意識の特質を取り出した。「正当防衛」については、治安体制の未整備、武器の社会拡散、身分制に基づく行為という社会条件、乱心・遺恨などの気質や恥辱感など、近世の特徴を解明した。

論者は、近世は公儀によって刑法・職権主義が浸透し提訴裁判による解決が拡大しながら、敵討・女敵討・無礼討の実力行使が容認された理由について、社会の道德観が強い規定力を持った点をあげ、国家も親子兄弟夫婦主従の直接的人間関係を重視するがゆえに、それを支える忠孝道德を奨励し、その一環に敵討・女敵討を位置づけたとする。そのため寛刑化が進む一方で、忠孝道德に反する行為に対しては厳刑化が進んだとし、また武士の力が弱まるにつれ無礼討が名誉防衛のために義務化されたことも明らかにした。「実力行使」は武士の特権とされてきたが、論者は、百姓・町人など庶民の世界でもそれが行われ、「正当性」を与えられたことを証明する。武士にのみ「正当性」が与えられる「実力行使」は無礼討のみであったことを明示した。

本論文への期待としては、ヨーロッパ社会との対比という視角だけでなく、政治文化に共通性の多い東アジア社会と比較した場合はどうか、また中世から近世への移行については検証したが、近代日本では「実力行使」は国家・社会の中でどういう方向をたどるのかなどの問題がある。それら今後の課題が残されているとはいえ、本論文の達成は、学界の水準から見ても注目すべき高さにある。よって本論文は、博士（文学、早稲田大学）の学位に相当するものと判断する。

2005年1月25日

主査	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	深谷克己
副査	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）	紙屋敦之
副査	専修大学教授		青木美智男

